■名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念シンポジウム

ウチナーンチュの移民
琉球・沖縄と南米の祖先崇拝

ペルー仏壇（撮影：我那覇宗孝）

2022年には、世界のウチナーンチュとの学術的・人的・文化的交流を促進すべく、名桜大学沖縄ディアスポラ研究センターが創設されました。同年には新型コロナウイルス禍を経て第7回世界のウチナーンチュ大会が開催されています。2024年1月には沖縄県による世界のウチナーンチュ交流拠点の設置構想発表があり、また同年末には第8回世界のウチナーンチュ大会の2027年10月開催が発表されるなど、世界のウチナーンチュの紐帯への関心は日々高まっています。

日本国内でも有数の移民県として知られる沖縄は、世界各地の県系移民とその子孫との特別な繋がりを有しており、その繋がりは心情的なものに留まらず、学術的、人的、文化的、経済的交流を通して双方を高めあう可能性を秘めています。

本シンポジウムでは、琉球・沖縄、そして沖縄からの主な移民先であるブラジル、ペルー、アルゼンチンにおけるウチナーンチュの祖先崇拝に注目し、琉球・沖縄におけるその歴史や現状、また各移民先における実践と変容を確認することで、世界のウチナーンチュ間における文化要素の共通性や多様性を知り、相互理解を促す機会とします。

プログラム

ファシリテーター：坪井 祐司（名桜大学教授）

開会の挨拶	13:00—13:05
嘉納 英明（名桜大学大学院国際文化研究科長）	
基調講演	13:05—14:05
琉球・沖縄の祖先崇拝 ～仏壇・位牌・墓に注目して～ 照屋 理（名桜大学教授）	
休　憩	14:05—14:15
シンポジウム　移民と祖先崇拝（各25分）	14:15—15:30
コーディネーター：照屋 理（名桜大学教授）	
①ブラジルのウチナーンチュと祖先崇拝（Sosen Suhai） 長尾 直洋（名桜大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）	
②ペルーのウチナーンチュと祖先崇拝 我那覇 宗孝（名桜大学客員教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）	
③アルゼンチンの沖縄移民社会と祖先崇拝の現在 月野 楓子（沖縄国際大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター協力研究員）	
休　憩	15:30—15:45
質疑応答	15:45—16:45
閉会の挨拶	16:45—16:50
坪井 祐司（名桜大学教授）	

2025.10.25(土)
13:00～16:50

参加対象者
地域・一般の皆様

参加費無料
事前申込不要

生涯学習・文化振興センター
ゆらてく
沖縄県うるま市字仲嶺187番地

■主催：名桜大学環太平洋地域文化研究所、名桜大学大学院国際文化研究科　■共催：名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター
■後援：名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念事業実施本部

■お問い合わせ先／名桜大学環太平洋地域文化研究所　〒905-8585　名護市字為又1220番地の1　TEL：0980-51-1107

■開学30周年・公立大学法人化15周年記念シンポジウム

ウチナーンチュの移民
琉球・沖縄と南米の祖先崇拝

基調講演

琉球・沖縄の祖先崇拝 ～仏壇・位牌・墓に注目して～

照屋 理（名桜大学国際学部国際文化学科教授・名桜大学「琉球文学大系」編集刊行委員会副委員長）

本講演では、いわゆる琉球文化圏（奄美から八重山諸島地域）において、おおよそ古琉球・中世琉球期（1429～1609年）から近世琉球期（1609～1879年）、そして近代沖縄以降（1879年～）の祖先崇拝について、仏壇、位牌、墓等といった事物をキーワードとして着目しつつまとめてみたい。まず古琉球・中世琉球期については、歌謡集『おもろさうし』を中心に、首里王府によって成された文化財資料類を対象にしながら祖先崇拝の観念を確認する。近世琉球期および沖縄県となった近代以降については、当時の士族やその関係者によって書き残された記録資料を主な対象として、資料中の記事に見える祖先崇拝に関する観念や有り様を確認する。琉球文化圏内で生きる我々、そして圏外へ“雄飛”していった人々にとって、祖先とは一体どのような存在であるのか、その観念の表象としての仏壇、位牌、墓はどのように広がり、継承されているのかを概観する。

シンポジウム　移民と祖先崇拝

①ブラジルのウチナーンチュと祖先崇拝（Sosen Suhai）

長尾 直洋
（名桜大学国際学部国際文化学科准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

本報告では、ブラジルへ渡った沖縄県系移民・移住者とその子孫による祖先崇拝の実践について、1908（明治41）年の第一回笠戸丸移民から第二次世界大戦までの戦前期、第二次世界大戦後から1980年代までの戦後期、そして1990年代以降から現在までの三期に分けてその信仰状況を確認する。具体的には、戦前期における集団単位での日本本土化と個人・家族単位での祖先崇拝の実践、戦後期における戦後移住者や戦前移民による位牌等のブラジルへの移動や「ユタ」の誕生と肯定的沖縄アイデンティティの析出、そして現代のコミュニティ紙による二世以降層への祖先崇拝の関心惹起や祖先崇拝に見られる宗教的習合について確認し、現在のブラジルのウチナーンチュが実践する祖先崇拝の様式がどのようにして形成されたのか、その歴史的背景を明らかにするとともに、その現状について主にサンパウロ州サンパウロ市における実践事例を紹介する。

②ペルーのウチナーンチュと祖先崇拝

我那覇 宗孝
（名桜大学客員教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

ペルーの沖縄移民は1906（明治39）年に始まり、1941（昭和16）年の真珠湾攻撃で移民は突然中断された。長い年月を経て、一世はほぼ亡くなり、二世は80～90歳代となった。三世・四世の多くは日本語や沖縄語を話せないが、「仏壇」と「お盆」は共通の記憶として受け継がれている。仏壇は家の中心に置かれ、線香を焚き、ウサンデーを供える日々の祈りを通して、祖先や家族、そして多くが訪れたことのない沖縄の風景や文化を身近に感じさせた。お盆は一年で最も重要な行事の一つであり、先祖を迎え送り、家族や親戚が集まり、料理や墓参り、儀式を通じて絆を深めた。その時間は、異国の地にあっても沖縄への思いと宗教心を新たにする大切な機会であり、世代を超えて文化と信仰を守り続ける力となった。

③アルゼンチンの沖縄移民社会と祖先崇拝の現在

月野 楓子
（沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター協力研究員）

日本人移民開始から100年以上が経過する中で、「世代間の継承」は移民社会内外で繰り返し論じられてきた。沖縄からの移民とその子孫が築いた社会においても同様であり、対象は文化や芸能、行事や慣習など多岐にわたる。中でも祖先崇拝は、家族ごとの事情や生活状況に大きく左右されるため、特に継承が難しい側面を有しているが、その特質ゆえにこれまで十分に論じられてきたとは言い難い。本報告ではアルゼンチンの事例を取り上げ、祖先崇拝をめぐる変化を紹介する。これまでの議論も踏まえつつ、今日の移民社会の姿の一端を示し、世代をこえた継承を考える手がかりとしたい。